

促進自律學習的會話課外活動 -台灣人日語學習者的“自由會話”-

徐孟鈴

銘傳大學應用日語學系助理教授

摘要

與日本國內相較下，海外的日語學習者無論課內或課外的會話練習時間皆不足。因此，學習者在課外主動接觸學習資源，主動自發的學習是不可或缺的。

有鑒於此，本稿爲了促進學習者自律學習，將課外活動“TJ的自由會話”導入會話課程。活動實施爲期8週。

本活動的實踐課題有以下3點。

1. 學習者利用課外時間，自己策劃日語會話的練習時間以及內容，養成自動自發學習日語的習慣。
2. 主動接觸身邊的學習資源，培養課外說日語的習慣。
3. 定期紀錄學習過程，並且檢視自我日語的使用情形，喚醒內省能力。

活動的實施的結果顯示，學習者養成了課外和同學說日語的習慣，從學習履歷中也可以觀察到學習者設定目標主動自發學習的習慣。另外，學習者在自我評價的過程中，也喚起了內省的能力。

關鍵字：台灣人學習者的自由會話，學習資源，自律學習，學習記錄單，自我評價

受理日期：2014.07.23

通過日期：2014.10.24

The Extracurricular Activity for the Conversation Course to Facilitate Self-Regulated Learning – “Free Conversations” of Japanese Learners in Taiwan

HSU, Meng-Ling

Ming Chuan University . Dept. of Applied Japanese Assistant Professor

Abstract

Compared with Japanese learners in Japan, those outside Japan have rather insufficient time for conversation practices in or outside class. Thus, it is essential for learners to spend their extracurricular time to obtain learning resources and learn voluntarily and actively.

Thus, this study aimed to facilitate learners' autonomous learning by implementing the extracurricular activity "TJ's Free Conversation" into the conversation course, with the activity length of 8 weeks.

The 3 practice subjects of this activity are as below:

1. Learners can make a plan to practice Japanese conversation with extracurricular time to form the habit of voluntary Japanese learning.
2. Learners can actively contact the learning resources (classmates) around them to develop the habit of speaking Japanese outside class.
3. Learners can record their learning process and review their own Japanese speaking condition to awake their introspection capability.

The result of this activity shows that the learners had formed the habit of speaking Japanese to classmates outside class. According to the learning portfolios, the learners had set up autonomous goals and formed the habit of voluntary learning. Also, the learners' introspection capability had been awakened during the process of self-evaluation.

Key words: free conversations of learners in Taiwan, learning resource, autonomous learning, portfolio, self-evaluation

自律学習を促す会話の課外活動 -台湾人日本語学習者同士¹の“自由会話”

徐孟鈴

銘伝大学応用日本語学科助理教授

要旨

日本国内に比べて海外の日本語学習者は授業内・外共に会話の練習時間が足りない。そのため、学習者が授業外で自ら学習リソースに働きかけ、自律的に学習することが望ましい。

よって、本稿は学習の自律性を高めることを目的とし、授業外活動「TJ 同士の自由会話活動」を授業と連携させ、8 週間にわたり実践してきた。

実践課題は以下の 3 つである。

1. 授業外の時間を利用して、学習者自身が日本語で会話する時間、内容などを自分達で計画し行う。日本語学習の自律性を養成する。
2. 身近な学習リソースに働きかけ、授業外で日本語で話す習慣を身につける。
3. 学習履歴をログシートに記入し、常にシートを振り返りながら自分の日本語の使用状況を意識させ、内省の力を喚起する。

活動実施の結果、学習者が授業外でクラスメートと日本語を使用する習慣が身につき、自分の目標を設定してチャレンジしていることが学習履歴から見られ、学習の自律性が育てられたことが分かった。また、学習過程を振り返り、自己評価することにより、内省する能力が喚起されるように思われる。

キーワード：TJ 同士の自由会話、学習リソース、自律学習、ログシート、自己評価

¹ 以下 TJ 同士と呼ぶ

自律学習を促す会話の課外活動 -台湾人日本語学習者同士の“自由会話”

徐孟鈴

銘伝大学応用日本語学科助理教授

1. はじめに

片山・菅（2010）では、学習者は教室活動という限られた時間と空間のみで日本語を習得しているのが望ましいことではなく、学習者が教室外で自ら日本語を使用することで日本語の運用能力を身につけていくのであると述べており、教室外での日本語接触の実態に関する研究は、十分とはいえないことも指摘している。筆者は片山が述べたことに賛同し、極限られている授業の時間で学習者に十分な会話練習をさせることができず、教室外における学習者の自律学習が必要であると考えている。

また、清水（2012）では、大学における授業外の日本語接触場面の傾向を調べ、実際の授業活動へのヒントを探ろうとした。新しく入った初級日本語学習者にアンケートを行った結果、調査対象の学生 60%が会話したいと答え、教師による会話活動への要求も大きいことが分かった。このことから、教室外会話活動と授業での活動の連携をうまくすれば、学生が会話機会を自ら求める方向へとさらに促すことができることが示唆されている。

上記を踏まえて、本研究では学習者同士による授業外の“日本語自由会話”活動を企画し、授業との連携をさせたのである。なお、学習者の身近にある学習リソースを活用することが本活動のポイントであるため、下記の先行研究の成果を参考にした。

浜田ほか（2006）は、「学習者が働きかけることによって学習環境が変化する」と述べており、学習者が身近なリソースに働きかけてはじめてリソースとの間に相互作用が起こってくるとしている。浜田ほかの指摘は日本国内で勉強する学習者についても言えるが、国

内に比べて学習リソースが少ない海外での日本語学習者にとって学習環境への働きかけは特に肝要だと言っても過言ではないであろう。学習者にとって、もっとも身近な学習リソースといえば、教師を除けば共に学習している勉強仲間であるクラスメートであろう。日本語が練習できる相手が常に身近にいて、お互いに日本語で会話する習慣を身につけることができたなら、学習者が日本語を口にすることに馴染み、会話能力が向上できることが期待できると思われる。

しかしながら、台湾人日本語学習者は英語圏の学習者に比べて、内向的で消極的な人が多いため、教師の力を借りて授業外の活動と授業を連携しなければ、学習者の自律性が育ちにくいと思われる。三宅（2007）では、「自律性は誰でもが初めから持っているものではなく、教育の中で育てるものである」という考え方は研究者の間でも共有されている」と述べている。

よって、筆者は授業外における台湾人日本語学習者同士（以下 TJ 同士）の自由会話活動を企画し、活動を通して学習者の自律性を育てることをはじめ、以下の課題を設定した。

自由会話活動の実践課題は以下の 3 つである。

1. 授業外の時間を利用して、学習者自身が日本語で会話する時間、会話の内容を自分達で計画し、行う。日本語学習の自律性を養成する。
2. もっとも身近な学習リソース（クラスメート）に働きかけ、勉強仲間と日本語で話す習慣を身につける。
3. 学習履歴をログシートに記入し、常にシートを振り返りながら自分の日本語の使用状況を意識し、次のチャレンジを見つけるなど、内省の力を喚起する。

本稿の構成はまず筆者が担当する大一会話の現状と授業の目標を概観したうえで、今回企画した“TJ 同士の自由会話活動”の位置づけについて述べる。次に、“TJ 同士の自由会話活動”のカリキュラム及び指導項目について報告する。最後に活動実施後の結果について述べて、全体的な振り返りをする。

2. 活動実施概要に先立って

この節では活動の実施概要に先立って、自由会話に関わる重要なキーワードを先行研究に関連させながら説明したうえで、活動の概要を報告する。

2.1 学習リソースについて

2.1.1 人的リソース 1：クラスメート（勉強仲間）の役割

自律的学習という観点から学習リソースを論じた論文には田中・斉藤（1993）がある。同掲論文では、「学習のリソースとは学習に関するインターアクションの対象となるもの」と定義し、「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」の3つに分類している。本稿の“勉強仲間”が上記の「人的リソース」に相当すると考える。

また、片山・菅（2010）では、「人的リソース」の働きについて研究している。学習者にアンケートをした結果、日本語の練習に一番役に立ったのはクラスメートだという結果が明らかになっている。

「初対面の相手や慣れない場所では、たとえ外国語の運用能力が高くても、緊張して思うように話せないものである。まして初級レベルの学生にとっては、勉強したばかりの言語を使って母語話者とコミュニケーションをしようとすることは、非常に負荷の高いチャレンジであるはずだ。しかし、クラスで共に学んでいるクラスメートなら、緊張感のないリラックスした状態で会話ができる（p.88）」と指摘している。片山・菅は、はじめから日本語母語話者と話すというハードルの高い挑戦をする前に、まず、仲間意識が持てるクラスメートという人的リソースで練習することが重要であるとし、学習者同士は日本語学習においての大切なリソースであると主張している。そして、教室外の学習環境を整え、実際の生活で日本語に接触する体験は、非常に重要であるとも述べている。上記を踏まえ、本稿では学習者の勉強仲間であるクラスメートを人的リソースとして活用したうえで、教室外の接触場面²という学習環境を作りたい。

² 鎌田（2004）を参照にすれば、本稿のように台湾人同士が日本語で会話する場面は「共通言語接触場面」と呼べそうである。

外国語学習においては、学習者同士というもっとも身近な学習リソースを用いて日本語を使用させ、それに慣れてから自ら進んで人的なリソースを広げていく段階を踏ませたほうがいい。そのような段階作りには教師の働きかけが欠かせない。よって、次節では教師の役割について考えたい。

2.1.2 人的リソース 2：教師の役割

清水（2012）では、教師が教室活動における役目を次のように述べている。「授業内での練習だけでは、質量ともに十分とはいえず、授業外で学生自身が会話の機会を作り、実践しなくてはならない。教師も学生の教室外の会話活動を促す方法を授業内に取り入れていかなくてはならない（p.151）」。

また、Schwienhorst, K. (2007)の論文では、教師が学習者オートノミーの発達において果たす大きな役割に言及し、リトルの原文を次のように引用している。「学習者オートノミーは、教師が学習過程と内容について徐々により多くのコントロールを学習者に許すことによって、学習者のオートノミーの範囲を次第に拡大していく相互作用の過程の産物である。」教師は学習者の発達するオートノミーに次第に道を譲るのであるとしている。それから、「教師は教育者として、そして該当分野の専門家として、不可欠である（Little, D. 2007、p. 20-26）。」とも述べている。

会話の授業では、ほんの僅かな時間内で様々な課題をこなさなくてはならないため、学習者に十分な会話練習をさせられない。したがって、教師が教室活動で果たす役割は次のようになるのではないかとと思われる。まず、教師が教室外の活動をデザインし、それを授業と連携し、教育者としてのフィードバックを与えるなどの支援をすることが望ましい。次に、学習者全員が共通した問題点をまとめ、如何に効率よく授業でシェアリングし、問題に対しての対処の方策を全員で共有することが該当分野の専門家としての教師の課題である。本稿の場合、TJ 同士はお互い非母語話者であるため、教師のフィードバックが学習者にとって欠かせないものだと考えられる。

今回の活動では、筆者が授業の担当者として活動をデザインし、授業に導入した。そのうえで、学習者の定期的な記録をチェックし、アドバイスをするような具体的な支援を与える一方、学習者を励ますなど心理的ケアをする役目も果たしている。

2.2 自律学習 (autonomous learning)

この節では、まず自律学習の定義について先行研究を概観したうえで、それが本稿における“TJ 同士の日本語自由会話”活動との関係について説明する。

自律学習は英語の“autonomous learning”からくる訳語で、研究者によっては漢字を使わずにカタカナ語で「オートノミー」と書く者もいる。青木・中田（2011）では、学習者オートノミー（learner autonomy）」を取り上げて次のように説明している。「学習者が自分の学習について、自分で意志決定を行えること、言い換えれば、学習の目的、目標、内容、順序、リソースとその利用法、ペース、場所、評価方法を自分で選べるということである」としている。しかしながら、ヒトは社会的動物であるから、完全な自由はあり得ないため、学習者オートノミーとは諸々の制約との相互行為の中で自分にとって最善の選択肢を選んでいく能力であり、学習者一人一人が置かれた文脈と相互依存の関係にあるのであるとも述べている。さらに、学習者オートノミーをより厳密に定義するために、リトル

（little、1991）の解説を引用し、学習者オートノミーについてよくある 5 つの誤解を取り上げて説明している（p.7-11）。

1. 学習者オートノミーは独習（self-instruction）の同意語ではない。独習の場合、学習者自身が内容や学習順番を決める余地はほとんどないためである。

2. 学習者オートノミーとは教師が全ての主導権とコントロールを手放すことであるものではない。学習者オートノミーを育てようとする実践が最終的に目指すのは学習者が教師なしでも学習できるようになることだが、そこに到達するまでに教師がやらなければならないことはたくさんある。

3. 学習者オートノミーは一種の教授法ではない。それは一定の手続きに従って教えれば必ず育つというものではなく、また一定の手続きに従わなければ育たないというものでもない。学習者オートノミーを育てるためのアプローチは多様であり、それぞれの社会、それぞれの教育機関に適したやり方があるであろうし、一人一人の学習者に適した働きかけの仕方もある。

4. 学習者オートノミーは学習者による特定の行動ではない。それは能力の一種であり、学習者オートノミーを発揮する人々の行動の形は一様ではない。

5. 学習者オートノミーはある種の学習者だけが到達できる、常に変わらない状態ではない。つまり、学習者オートノミーが優秀な学生達だけがもつもので、普通の学生には無理だということではない。それは誰でも持ちうる能力で且つ育つものである。またあることを学ぶためのオートノミーはあるが、他のことは助けがなければ学べないということもある。（下線筆者）

本稿では、“学習オートノミー”に代わって“自律学習”という用語を用いることとする。上記にあるリトルの解説を踏まえて、さらにガンツェツェグ（2007）、岡崎（1990）、などの定義を加え、自由会話という活動によって育てようとする学習者の“自律学習”を次のように定義する。「学習者は自分の学習過程に責任を持ち、教師の協力を得ながら、自分にとって最善な学習方略を選び、学習過程を分析したり、学習のステップ化を考えたり、実現することである」。

2.3 大ニ会話の現状

表 1 大ニ会話の授業状況

クラスの人数：2013 年、受講人数 16 名。
学習時間数：週 3 時間で、大ニの前期までには約 40 週で 120 時間である。
教材：『新実用日本語会話Ⅱ』、『新実用日本語会話Ⅲ』 ³ 。
進度：週 3 時間で 1 課程度、1 年間で約 32 課を終えている。
授業目標：中級レベルの文型を身に付けて、それを自己表現やコミュニケーションに生かすことである。

³ 銘伝大学の自作教材である。各課は「語句」、「文型練習」、「Q&A」、「小会話」、「応用会話」、「参考語彙」から構成されており、構造シラバスを中心に、場面と機能シラバスが補助として取り入れられている複合シラバスの教材である。

※2013 年前期の授業の実践活動では、「談話の開始&展開&終了」の技術、会話時の「話し手&聞き手」⁴の談話技術などを学習した。

上記の授業の目標にもあるように、大二会話の授業は学習者が身につけた中級レベルの知識をコミュニケーションに生かすことである。そうであるならば、学習者に自由にコミュニケーションできる学習環境を提供することが望ましいであろう。しかしながら、会話の授業は週に僅か 3 時間しかないうえ、文型を導入したり文法の説明をしたりするので、学生に日本語を話させる時間は限られているのが現状である。また宿題は会話文の暗記であったり、質問に答えたりするようなものがほとんどである。そういった宿題に対して学習者に聞いてみると、1 人で練習することが多いということが分かった。また、授業外の時間にクラスメートと日本語で話しをすると傲慢だなどマイナスイメージを与える恐れがあると心配している人もいるそうである。そのような経験を筆者が学生時代にもしたことがある。そういうわけで、台湾における学習環境では、授業外での語学練習はまだまだ教師によるサポートが必要であると思われる。

3. TJ 自由会話活動について

3.1 TJ 自由会話活動カリキュラム実施の概要

TJ 自由会話活動のカリキュラムは次の表 2 の通りである。始まる前に、教師が活動の目標、実施の要領を説明したあと、学習者に自由に 2 人でペアを組んでもらった。今回は受講生 16 名で計 8 組⁵である。実施前に学習者の課外での日本語会話学習に対する意識調査のアンケートを行った。なお、一週目だけ、教師が自由会話のテーマとなる参考資料⁶を提供し、学生に自由会話の参考内容を提示した。

⁴ 詳しくは徐（2014）を参照されたい。

⁵ クラスには再履修生が 2 人いるため、「先輩 VS 後輩」コンビが 2 組いた。最初は二人の時間が合わせにくいとの相談があったが、先生が中間に入って折衷案を提示することによって問題が解決した。

⁶ 1 週目の参考資料は『作文 I－身近なトピックによる表現練習』（第 31 課：「夏休み」）鴻儒堂、より抜粋した。

表 2 TJ 自由会話活動のカリキュラム

時間	作業の段階	作業の内容
1 週目	実施前の準備	1. アンケート調査をする（※1、6、10 週に行う）。 2. 2 人でペアを組む 3. 教師が提供した資料を参考にして、録音の内容を考える。
	1 回目の録音実施	1. 教師が提供したテーマを参考に、5 分程度の自由会話を録音する。
	1 回目の録音実施後	1. 録音ファイルを Moodle に提出する。 2. ログシートに記入する。
	2 回目の録音の実施	1. 自由にテーマを決めて、5 分程度の自由会話を録音する。
	2 回目の録音実施後	1. 録音ファイルを Moodle に提出する。 2. ログシート、評価シートに記入する。
2-6 週目	1 週目と同じ作業を繰り返す。6 週目にこれまでの気づき報告書を作成し、教師に提出する。	
6 週目	教師が全員の気づき報告書を作成して配布し、シェアリングする。	
6-7 週目	6 週目の内省を踏まえ、引き続き作業を繰り返し、中間テストに備える。	
8 週目	中間テストの実施（自由テーマ）	
9 週目	※全校試験の週であるため、休講となる。	
10-11 週目	教師が中間テストの結果を含め、これまでの活動全体を振り返ってフィードバックを与える。	

上記表 2 の通り、学習者がペアを組み、1 週目は教師が用意した資料を参考にしたうえで、会話の流れや内容を考え、録音する。こうして週 2 回 5 分程度の自由会話を録音していく。作業の流れとして、1 回目の録音をしたあとで、録音ファイルは Moodle⁷に提出し、

⁷ Moodle : Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment、銘伝大学の e ラーニング学習管理システムである。

録音後すぐログシートを記入する⁸。1 回目のログシートの記録を振り返り、内省をしてから 2 回目の録音をする。2 回目の録音作業は 1 回目の要領と同様であるが、ログシートと評価シートを記入した後、次の週の授業で教師に提出し、フィードバックをもらう。

なお、2 週目以降は自由会話のテーマや内容、録音を行う時間などは学習者同士が自分達で相談し、各自で考えることになる。このような作業を 6 週目まで繰り返す。一方、教師のほうは毎週ログシートと評価シートをチェックし、フィードバックをする。学習者のニーズに応じて、録音と一緒に聞いて適時にアドバイスをすることもある。

6 週目は活動の半分を過ぎている時期であるため、自分の録音、ログシート及び評価シートをもとに、これまでの内省（気づき）報告書を作成し、教師に提出する作業がある。報告書の形式は自由であるが、必ず次の 3 ポイントを含めるものとした。①今まで目標を設定し、頑張ってできたこと、②頑張ったが、まだ上手にできないこと、及びその原因、③今後の目標及び改善策。教師が学習者全員の気づき報告書の要点をファイルに記録し、クラスでシェアリングしたあとで、Moodle に載せて、履修生がいつでも閲覧、コピーできるようにする。

6 週目の内省を踏まえ、7 週目は、8 週目の中間テストに備え、準備資料を提出する。8 週目には自由テーマで学習者が普段練習する仲間とペアで日ごろ練習しているように中間テスト⁹を受ける。

このように計 8 週間の自由会話を録音してもらったが、学習者の学習意識に変化があったかを知るために、実施前（1 週目）、実施中（6 週目）、実施後（10 週目）¹⁰に 3 回アンケート調査及びフォローアップインタビューを併せて行った。

⁸ ログシートの記入は中国語によるものである。

⁹ 消極的な学習者が練習を怠らないように、自由会話の中間テストを設けたが、別にある正規課程の中間テストの成績には計算されず、平常点の一部として計算される。

¹⁰ 銘伝大学の場合、9 週目は統一試験の週で、授業がないため、実施後アンケートが試験後の 10 週目に行うことになった。

10－11 週には中間テストの結果を含め、8 週間続いた自由会話活動全体について振り返り、学習者同士の感想を聞いて教師が内省してから全ての活動が終了となる。

前述した自由会話活動における学習者の作業の流れを改めて図で示すと次の通りになる。

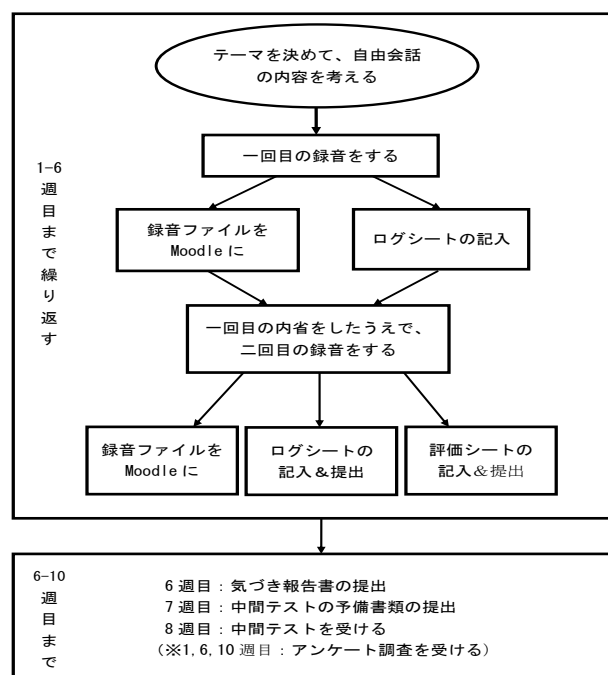


図 1 学習者の作業の流れ

3.2 ログシート及び評価シートの記録

今回の TJ 同士の自由会話活動では、毎週 A) ログシート 2 回、及び評価シート 1 回を記入をしてもらうことになっている。ログシートと評価シート 8 週分の記載内容が学習者が内省するデータとして使われる一方、教師が指導する手がかりにもなる。

A) ログシート

片山・菅（2010：81）では、学習者にログシートを記録させることは以下のような内省を促す働きがあると述べている。

- A) ログの記録を通じて自分の日本語使用状況を意識させる。
- B) 過去の経験と比較し、できるようになったことやできていないことを意識する。
- C) 記録を振り返りながら次のチャレンジを見つける。

また、フォローアップインタビューを併せて行うことでログシートではっきり分からなかったことが確められる。本稿は片山・菅の研究手法を援用した。

本稿におけるログシートの記入項目は、録音を行う日にち、長さ、主な談話内容である。また、録音したあとで、自分がよくできたと思ったところや難しいと思ったところを中国語で書いてもらう。2回目の録音は1回目の録音を踏まえたあとのものなので、両者の異同に気付きやすいように1枚のA4用紙に記入できるようにシートをデザインした。週2回1枚のシートを書いたあと、翌週に教師に提出してもらい、教師が最後の欄にフィードバックをしてから、学習者に返却することになる。下記がシートの例である。

ログシートの例

第 週		名前:	
第一次録音		第二次録音	
日付:	日付:	録音時間:	録音時間:
テーマ:	テーマ:	主要談話流程:	主要談話流程:
表現不錯的地方	比第一次進步的地方	不會或失敗的地方	不會或失敗的地方
不會或失敗的地方	其 它	教師回饋	

B) 評価シート

学習者に自己評価をさせることによって、内省の能力を喚起できると言われている。「最近 JF スタンドで提案された評価方法としてポートフォリオ評価が注目された。ポートフォリオは主に『評価のものさし』、『学習の記録』、『学習の成果』の3要素から構成さ

れており、評価するためには『内省の力』が欠かせない」。また、『自己評価』活動について、教師や外部からの評価が困難な学習者の内面世界は学習者が自分自身で点検、吟味するのがよいことも指摘されている（陳 2013：32）。陳（2013）では、自己評価に慣れていない学生においては、教師主導に慣れ、またそれを望み、比較的受身になりやすい学習者が多い。それらの問題を解決するための第一歩として内省の能力を喚起し、学習者が主体的に取り組む工夫をしなければならないとしている（p.33）。

従って、本稿も下記表 3 のような評価シートを学習者に毎週 1 回記入させることにした。なお、8 週目は中間テストの週であり、この週のみ、学習者の自己評価と教師の評価との両方がある。

表 3 自己評価シート

録音日程 談話構成要素	1 週 目	2 週 目	3 週 目	4 週 目	5 週 目	6 週 目	7 週 目	8 週 目 自己	8 週 目 教師
1. 会話の開始&終わり&展開など、全体的な自然さ									
2. 主な談話内容（充実さ、面白さなど）									
3. 会話者双方発話量のバランス									
4. 話し手役の時の談話技術（言いよどみ、注意喚起、説明など）									
5. 聞き手役の時の談話技術（相づち、確認、聞き返し、フォローなど）									
評価指数の平均									

上記の評価シートは左の欄は 2013 年度前期、筆者が会話授業の課外実践で授業に取り入れた談話要素の指導項目である。録音後、学習者がそれぞれの項目に自分で 5 段階の評価¹¹をし、自分の録音内容における談話構成要素を点検することができる。そして、8 週

¹¹ 5 段階評価とは：5 は非常によい、4 は良い、3 は普通にできる、2 はあまりできなかった、1 は全然できなかった。である。

間記録したあと、自分の学習過程、或いは成長記録を評価シートで振り返ることもできる。なお、シートの評価は学習者の内省結果であり、授業の評価対象外である。

3.3 アンケート調査（1、6、10 週目）¹²

本稿におけるアンケートの構成は主に 5 つの部分から構成されている。実際のアンケートは巻末資料を参照されたいが、14 問のアンケートでは、まず 1－5 問目は授業外で自分が日本語を話す習慣に関する意識変化の調査である。6－9 問目は学習者同士で勉強する状況に関する意識調査で、10－11 問目は授業外の時間を利用して、自分で課題を達成するための時間計画や記録の記入に関する設問である。12 問目は教師の協力、13－14 目は自由会話という課題について困ったことや自由感想などである。

なお、アンケートの最初の意識調査の部分は（1-3 問）学習者が授業外に日本語を使用する習慣の変化を知るものであるため、自由会話の実施前、実施中、実施後にわたり、毎回質問されることとなる。アンケートの結果については 4.4 節で詳述する。

4. 考察

4.1 ログシートの結果

ログシートは 3.2 節で示した通りであるが、実際の記入例は巻末資料Ⅱを参照されたい。まず、日付の記入のところで問題になったのは、学習者のなかで、自分達の都合で同じ日に 2 回録音した者がいた。その場合、学習者にこの課題の目的が日本語を使う日にちを増やすことである旨を伝え、次回から録音は異なる日で行うよう指示した。

次にテーマについては、自由会話の 2 週目から各グループにそれぞれ自分の好きなテーマを自由に選択してもらったが、最初の頃は「冬休みのこと」をはじめ、「近況報告など自分をめぐる話題」が多かった。時間が経つにつれて、3-4 週目以降は「好きな歌手」から、「アニメ」、「オンラインゲーム」、「旅行や留学願望」など様々な話

¹² アンケートは巻末資料Ⅰを参照されたい。

題が持ち出された。

録音の長さについては、規定通りに毎週 2 回、5 分程度のものを録音するグループもいるが、4 週目以降は録音時間が少しずつ増えたグループも見られはじめ、20-30 分ぐらいまでに録音時間が増えたグループが 2 組見られた。

それからシートに記入された「よくできたところ」、「あまりできなかったところ」を見ると、3 週目ぐらいまでは録音の時間や文法的なミスでいっぱいになって、談話の内容まで気が回らないグループが多かった。以下考察結果について述べる。

4.1.1 「できたこと」について

最初の一週間においては、「よくできたところ」の欄には、「よくできたことはないと思うので、書けない」というグループがいるぐらい、5 分間の録音だけでいっぱいになった学習者の感想がシートに書かれていた。そのように挫けた学習者に「5 分間完全に日本語でしゃべれた」という自分達のことを肯定的に認め、まず自分達を肯定的に評価してみようと教師からアドバイスした。また、評価シートの「談話要素の項目」（前期の談話指導項目）を参考にしたうえで、毎回 1 つの項目でもいいからチャレンジする目標を設定してみることもアドバイスした。録音後自分達の録音内容を客観的に見つめ、設定された目標に近づいたかどうかを確認するのも 1 つの方法であることも教えた。そういったアドバイスを受けた学習者が 3-4 週目ぐらいから、5 分間の録音が徐々にクリアできるようになり、「前より課題が簡単にクリアできた」とか「全体的な会話が前に比べて自然になった」などのことをログシートに書き始めた。学習者が書いた「できたこと」は次のようにまとめられる¹³。

¹³日本語訳は筆者によるものである。

表 4 「よくできたところ」のまとめ

会話全体について： ・ 会話全体が自然になった ・ 会話参加者の発話量のバランスがよくなった。 ・ お互いに聞き返せるようになった ・ インターアクションが自然にできた。 ・ 談話の終了が自然になった。 ・ 沈黙の時間が少なくなった。 ・ 事前に原稿を作らなくてもおしゃべりできるようになった。 ・ ジョークや笑いが増え、緊張しなくなり、録音が楽しくなった ・ 話題の切り替えが自然になった。 ・ 時間になってもまだまだ話したくなった。 ・ 単なるおしゃべりではなく、お互い興味をもつ話題が分かった。 ・ 普通体が自然に使えるようになった。	話し手役として： ・ 授業で習った文法を実際に運用できた。 ・ 新しい単語、新しい話題が話せるようになった。 ・ 少し長い文が話せるようになった。 ・ 自己修正が出来た。 ・ 相手の日本語が直せた。 ・ 日本語で相手をからかったり、冗談が言えるようになった。 聞き手役として： ・ 相手の発話に適当な相づちが打たれた。 ・ 関連した質問ができるようになった。 ・ 相手を助けられた。 ・ 普通体が自然に使えるようになった。
---	---

4.1.2 「できなかったところ」について

「できなかったところ」は「できたところ」と反して、課題遂行の最初に多く書かれたが、時間が経つにつれて減るようになった。課題が繰り返されるうち、最初に感じた問題が少しずつ解決されるような傾向がある。

ログシートに基づいて「できなかったこと」をまとめると、下記の表 5 の通りにまとめられた。学習者の内省によって、浮かび上がった「できなかったこと」は今後授業の指導項目の参考になると思われる。

表 5 「できなかったところ」のまとめ

会話の全体について： ・ 緊張して頭が真っ白になった。 ・ 沈黙が多かった ・ 緊張したのと照れるのとで、笑いが多かった。 ・ 話題の結束性が弱く、飛び飛びになった。 ・ 普通体と丁寧体の使い分けができなかった。 ・ 談話の終了が不自然だった。 ・ 2 人の発話量のバランスがよくない。 ・ 5 分になっていないうちに話題が切れた。 その他： ・ 録音の場所がよくなかったため、録音	話し手役として： ・ 言いたいことが流暢に言えない。 ・ 運用できる単語の量や文型の数が少なかったので内容的に繰り返しが多かった。 ・ 相手が分からないことを説明できなかった。 ・ 難しい話題を急に持ち出して、言いたい単語が言えなかった。 文法的な間違いが多かった。 聞き手役として： ・ 相づちに変化がなく、「そうですか」ばかりを言う。 ・ 相手の話を理解できないとき、どう反応すればいいか分からなかった。
--	---

4.1.3 1回目より進歩したところ：「次の目標と改善策」

2週目の録音後には、「1回目より進歩したところ」にも記入することになっているが、この箇所では、学生達が自分で前回の記録を振り返り、次の目標を立ててチャレンジしたことを記入するところである。3週目ぐらいまでは学習者は文法的なミスや沈黙などばかりを気にして、目標を設定する余裕がない者が多かった。しかしながら、4-6週目になって、録音に慣れてきたグループがもっと録音の内容を充実させ、パートナーと有意義な会話時間を過ごしたいと思うようになりはじめた。そのようなグループは参考資料を事前に用意したり、相手が知らないと予測した単語の説明を準備するぐらい、自由会話に備えた。こうしているグループの談話内容を見ると、話題の選択が豊かになり、談話の内容にも深みが出てきた。

一方、録音の前に何も準備せずに、実力で勝負するグループもいた。そのようグループは事前準備をせずに、普段の実力で自然にトークしている。これは再履修生や編入生など自分の会話力にある程度自信があるグループの様式である。

このように違う形で録音が進められたが、学習者にはそれぞれ自分の目標があり、毎週違う目標を設定し、チャレンジした記録が観察された。チャレンジした項目には、例えば、「相手の発話に適切に相づちを打ち、フィードバックもする」のような目標から「普通体に統一して話す」、「談話の展開を自然にし、一貫性を保つ」などの項目がシートに記入されていた。

4.1.4 教師のフィードバック

教師は毎週 Moodle で録音のアップロード状況をチェックし、ログシートにフィードバックを書いた。シートでは分からない箇所はフォローアップインタビューをし、学習者の質問にも答えてアドバイスした。

活動が始まった最初の頃は、学生のシートでは「できたところ」より「できなかった」ところのほうを多く書く傾向があった。また、インタビューでは、「5分間は長すぎて、何を話したらいいかわからない」、「用意した話題が切れても、まだまだ時間が残っていた」、「文

法的なミスが多いから気になる」などの感想を聞いた。そういった場合には、教師は「文法的なミスに気付くことができたなら、次回修正すればいい」とアドバイスをする一方、談話の内容については「事前に大まかな内容を考えておく」とか、「話題を次から次へとすぐに変えずに、1つの話題についてたくさん関連質問をして、話題を掘り下げる工夫」をするように助言をした。教師のフィードバックはそれぞれのケースに応じたものであるが、学習者が必要とした談話の技術を提供する一方、学習者の心理的な不安を取り除く役割を同時に果たしたのである。

4.2 学習者の気付き（内省）報告書¹⁴

6週目に学習者全員にこれまでの記録を振り返り、ペアで気付き報告書をまとめ、提出させた。内省のポイントは次の3つである。①これまで頑張ってきたところ、②頑張ったが、達成できなかったところ、その原因、③今後の改善策及び目標の3点である。教師が全員の内省項目をまとめたうえで、授業でシェアリングをした。全員が共通してできたところは4.1.1節表4とほぼ同じであるため、割愛する。ここでは全員の共通した問題点を取り上げて分析する。学習者の問題点は次のように4つに分類することができた。

① **意識して練習すればすぐに解決できる問題**：これは例えば、聞き手に回されるとき、「相づちを打ち、フォローをすること」、「知らない単語を聞き返すこと」、「両者の発話のバランスをとること（談話主導権の受け取り&受け渡し）」などの言語行動である。これらの問題については、学習者が自分で意識して練習すれば、すぐに改善できるものと思われる。

② **事前に準備すれば解決できる問題**：この項目の例として、例えば、話し手役の場合、「ある特定な事柄に関する専用名詞を相手に説明すること」、「談話の開始&展開&終わり」などの談話技術の運用問題、また、聞き手役の場合、「変化に富む相づちを打つこと」、「話題に関連する情報を提供すること」などの問題点

¹⁴気付き報告書の例は巻末資料Ⅲを参照されたい。

が挙げられる。これらの問題については、事前に予習し、練習しておけばすぐに運用できるものと思われる。なお、「相づちのバリエーション、関連情報の提供」、「談話の開始&展開&終了の技術」については、前期の授業で取り上げてクラス全員で練習済みである。

③**経験を積みれば解決できる問題**：例えば、「緊張感を解す」、「相手の興味或いは談話スタイルに合わせてフォローをしたり、お互いに助けあったりして、二人で会話を築き上げていくこと」などの項目が挙げられる。これらの項目は言い換えれば「個人の心理的要素（緊張する程度）」や「相手と息を合わせる」といったものであるが、そういった要素に関する対策としては、談話相手と共に経験を重ねることによって、問題が解決されていくと考えられる。

④**短期間では解決できない問題**：最後のこの問題は例えば「文法のミスなしに流暢に会話すること」のような項目は短期間では解決できない問題である。しかしながら、今回の活動は「話す習慣を身につけることに焦点を合わせたため、文法的なミスには執着せずに、学習者の気づきや自己修正に任せた。

4.3 評価シートの結果

評価シートは週1回、教師が回収して確認しているが、8週目にはこれまでの記録を改めて振り返った。その結果、ログシートでは「できたところ」が増えてきたのにもかかわらず、そのわりには自己評価は上がっていかなかった。当初の筆者の予測では、時間が長くなるのにつれて自己評価が徐々に上がっていくものだったが、それとは裏腹に、ほとんど全ての学習者が保守的に評価をしていた。5段階の評価では、大体3-4までの評価が多く、指数の平均も全員3-4の間だった。ログシートの成長に比率して自己評価がそれなりに上がらなかった原因はの1つにはアジアの学生には控えめで保守的な人が多いためであると考えられ。

さらにグループの個別評価を見ていくと、8組のうち、3種類の

評価様式に分かれた。1つ目は自分に甘く、実際の日本語レベルより少し高く評価するグループ、その次は自分の能力と大体同じ程度の評価をするグループ、それから最後は自分に厳しく、実際のレベルよりも低く評価するグループである¹⁵。このように3つの評価パターンに分かれるため、学習者の全体的な評価の変化を同じ基準で判断することができない。しかしながら、学習者達が自分の物差しで自分の能力を測り、その変化を意識することは内省能力が働いた証であると思われる。

4.4 アンケートの結果

実施前のアンケート（第1週）：

1. 你一週中上課時間以外，平均有幾天會自動說日語？
2. 你平均一天用到日語的句數大約是？
3. 你想增加課外說日語的機會。

上記に示されたアンケートの最初の3問は毎回決まって聞く内容である。この3問は学習者が普段、授業外に日本語を使用する状況を確認する狙いがあると共に、課題の実施時間が経つにつれて、学習者が授業外に日本語を使う習慣を意識し、変化が見られるかどうかを確認する目的もある。

録音を実施する前の調査結果では、質問1「授業時間以外に週に平均で何日間自ら日本語を話しているか」については、学習者16人のうち、「ほとんどない」を選択した人は14名、「1～2日」程度の人が1名、「3～5日」の人は1名である。因みに、週3～5日自ら日本語を話す人は編入生で、日本料理屋でバイトをしている人である。この人を除いたら、ほとんど全員が授業時間外に日本語を使っていないことが分かった。従って、2問目である「授業時間外に、毎日使用している日本語の平均文数はいくつぐらいか」という質問では、日本料理店でバイトをしている人を除いて、全ての人が選択肢のもっとも少ない「1～4文使う」を選んだ。最後の3問目「授業外に日本語を話す機会を増やしたいか」という設問に対して、全ての学習者が「はい」と答えた。

¹⁵実際の能力レベルは教師がログシートの内容や録音内容など具体的な手がかりを参考にして判断を下したものである

4.4.1 実施中のアンケート（6週目）

6週目のアンケートは巻末資料Ⅰの通り、計14問で5つの部分から構成されている。

まず、授業外で自分から日本語を話す習慣については、1週目で「ほとんど使わない」と答えた14名の学習者のうち、12名が「1-2日」、3名が「3-5日」、1名が「ほとんど毎日」を選択するようになり、少しずつではあるが、ほとんど全員が日本語を話す日数が増え、授業外でクラスメートと日本語を話す習慣が身についている変化が窺えた。それから、一週目に「3-5日」と答えた日本料理店でバイトしている編入生が「ほとんど毎日」日本語を話すようになった。

アンケートの2つ目の部分は「学習者同士の録音の練習」についての設問であるが、学習者全員が「パートナーと日本語で話すことに慣れた」と答え、「課題を通してパートナーとの交流が増えて」嬉しいと答えていた。しかしながら、「パートナーと話すことはプレッシャーがない」という設問3に関しては、4名の学習者が「同意しない」と選択した。このような結果について、インタビューで確認した結果、理由は次の2つであることが分かった。まず、「一応宿題であるため、多少プレッシャーは感じる」と学習者が述べた。それから、もう一つの理由はパートナーが再履修生の先輩であるため、お互いのことをあまり知らないし、興味も違うからプレッシャーを感じた」と述べた。

次の教師のフィードバックの設問に関しては、全ての学習者が教師のフィードバックがなければ録音という課題の意味がなくなると感想を述べた。このような結果については、前述したように、アジアの学生は教師主導に慣れていることと、会話参加者双方が非母語話者であるため、教師の協力が欠かせないことが示唆されている。

アンケートの最後における「自由会話についての困ったこと」については「パートナーと時間を合わせるのが難しい」との声があった。銘伝大学の場合、授業が終わったら学生がすぐスクールバスに乗って市内に帰っていき、行動がスクールバスの時間に束縛されて

いるのが原因の 1 つだと考えられる。

また「静かな録音の場所が見つからない」、「録音するのが面倒くさい」などの感想も書いてあったが、今後もこの活動を実施するのなら、これらの課題を検討していかななくてはならない。

4.4.2 実施後のアンケート（10 週目）

10 週目のアンケートの構成は 6 週目と全く同じであるが、自由会話という課題を通して、学習者の学習意識に変化があったかを見るために、引き続き実施した。

まず、【授業外で日本語を使用する状況】に関しては、10 週目になっても、4 名の学習者は「1-2 日」使用することに変わりがなかった。一方では、「3-5 日」と答えた人が 6 週目より 7 名増え、10 名となった。それから、「ほとんど毎日」と答えた人が 2 人であった。このような結果から、授業外で日本語を使う習慣が 3/4 の学習者に身についた変化が見られた。ただし、課題を遂行させながらも、依然として日本語を使用する習慣があまり変わらなかった 4 名の学習者がいた。4 名の学習者は全体の 1/4 であるが、このような消極的な学習者についてはどのように学習の自律性を育てるかについて、今後考えなければならない課題だと思われる。

次に、【学習者同士で日本語を学習する状況】に関して、6 週目との違いをいえば、「先輩のことをあまり知らなかったからプレッシャーを感じた学習者」は、「先輩の興味のある話題に少し合わせられるようになり、感想も言えるようになった」と述べたことである。また、6 週目に「宿題であるため、多少プレッシャーは感じる」と言った学習者は「プレッシャーを感じるのは性分であるため仕方がないが、知らない人と会話するより楽である」とインタビューで述べている。

最後に、この【課題の自由感想】に関しては、「勉強になる課題なので、後輩にも是非やらせてほしい」という肯定的なコメントもある一方、「録音するのがちょっと面倒くさい」という文句も聞こえた。スマートフォンが普及してきている現在では、携帯で録音することが簡単になってきている。そうではあるものの、録音を Moodle にアップロー

ドするのを面倒くさがる学生が依然としている。録音が面倒だという点については、今の段階では教師が学習者とよくコミュニケーションをとって、学習者に納得させるしか方法が考えられないが、これも今後の課題である。

4.4.3 中間テストの結果

学習者は自由会話の経験を7週間繰り返したうえで、最終的な成果を8週目の中間テストで披露することとなる。中間テストの前の週の7週目には、学習者が話したいテーマを決めて、大きな談話の流れのポイントを示し、また参考となる資料をまとめたうえで、教師に提出することになっている。下記は学習者が提出した資料の1例である。

中間試験の予備資料例

中間試験の雑談

1.テーマ：いいアプリ

2.話の流れ：

今何をしていますか。

↓

いいアプリをお勧めます

↓

アプリのゲーム

3.内容のポイント：

PokePangをしています。

いいアプリをお勧めます。

布卡漫画と都道府県の雑学と電車と新幹線の時刻表（雙鐵時刻表）を紹介します。

アプリのゲームをしていますか。

4.参考情報：

単語を調べる

<http://www.weblio.jp/>

アプリの紹介する

http://andronavi.com/newly-posts?current_page=2&category=game&price=0&limit=25&graveure-include=

学習者が提出したテーマはそれぞれ違っているが、自分が興味を持つテーマにしていることが資料の量や質から一目瞭然である。

テストの際、学習者が普段自由会話をしている相手といつものように受講生全員の前で5分間の自由会話を行う。普段と違うところは5分となったら、すぐに自由会話を終了してもらうことである。

録音が終了したら、教師が評価するとともに学習者にも自己評価をすることとした。結果を先に言うと、学習者全員の自己評価は普段とはほとんど変わりがないが、全体的には教師評価より低かったことが明らかになった¹⁶。テストで特に興味深かったことは、自由会話という課題をさせた最初の頃では、「5分間が長すぎて何を話したらいいか分からなかった」とログシートに記入していた学習者達がテスト終了のタイマーが鳴った瞬間、「もう終了なの」とほとんど全員がびっくりした顔をし、まだまだ話を続けたいと感想を述べていた。これは7週間の経験を積んだ効果で学習者が自由会話に慣れ、5分間会話するという課題が容易にクリアできるようになった証なのではないかと思われる。また、学習者の会話を聞いた教師の感想として、学習者全員に文法的なミスは多少あったものの、気になるほどの沈黙などはなく、全員が会話を最後まで自然に展開していると感じた。学習者によっては、ジョークを入れたり、ジョークに併せてアフレコをしているように音質を変えて会話を楽しんでいる者もいた。中間テストの場合は全員事前に資料を用意していたから、パフォーマンスの出来がいいことは当たり前といえそうかもしれない。しかし、談話の技術（相づち、フォロー、確認や聞き返しなど）を自然に会話に組み入れて、運用できることに関してはにわか仕込みでできるものではないため、やはり普段の練習効果が反映されたと思われる。

5. 終わりに

5.1 結論のまとめ

本稿は学習者の学習自律性を高めるための授業外活動として「TJ 同士の自由会話活動」を企画し、実践してきた。学習者が記入したログシート、自己評価シート、気付き報告書をはじめ、活動実施前・中・後のアンケートの結果を見ると次のような結果が分かった。ログシートから、学習者が自由会話という課題に慣れてきて、それぞれ自分の目標を設定してチャレンジしていることが見られた。次に、

¹⁶ 8組の学習者の自己評価の平均が3.8であるのに対して、教師の評価の平均が4.3であった。

気づき報告書では、学習者が学習過程を振り返り、内省する能力が喚起されるように思われる。なお、学習者の内省の「ものさし」は一律ではなかったが、自己能力に焦点を合わせて、点検しただけでも自己評価の価値があるように思われる。それから、アンケートの結果からは、3/4の学習者が課題を遂行しているうちに、授業外でクラスメートと日本語を使用する習慣が身についたことが明らかになった。言い換えれば、学習者が自由会話という課題を通して、クラスメートという学習リソースを活用し、自分から日本語を話すことを企画し、実行してきたのである。つまり、自由会話という課題を通して、学習の自律性が育てられたと言えそうである。しかしながら、一方では、自立性が育てにくい1/4の学習者への効果的な働きかけ及び指導法は今後考えなくてはならない課題でもある。

5.2 教師の振り返り

三宅（2007）では、授業外の自律学習について「学習者が自らの学習に関し、自分で責任をもち、学習過程をモニターしたり、自分に合った学習方法を見つけ出すといったことは、これまでの教師主導による一斉授業では、求められることは多くなかった（p.128）」と述べている。本稿が実践した TJ 同士の自由会話活動は三宅の指摘にある学習者が中心となり、自分で学習過程をモニターするような学習特徴をもっており、従来の伝統的な教室活動とは異なった新たな試みと言えよう。新たな試みであるからこそ、教師の活動への関わり方が非常に重要である。特に始まる段階で学習者に問題解決の方法の提示、心理的不安の取り除きなど、しっかり役目を果たすことが必要不可欠である。

今回は学習者の録音内容まで考察することができなかったが、TJ 同士が非母語話者であるため、目標言語話者から支援を期待できず、自己調整による積極的なストラテジーを取らなくてはならないという状況におかれている。今後 TJ 同士の自由会話場面にあるそのような言語特徴あるいはストラテジーを探ってみることを課題としたい。

参考文献

- 青木直子（2006）「教師オートノミー」『日本語教師の成長と自己研修』、p.138-157、凡人社
- 青木直子・中田賀之（2011）「学習者オートノミーー初めての人のためのイントロダクションー」『学習者オートノミーー日本語教育と外国語教育の未来のためにー』、p.1-15、ひつじ書房
- 岡崎敏雄（1990）「日本語教育における自律学習」『広島大学日本語教育学科紀要』2、p.9-14
- 片山智子・菅智穂（2010）「日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査」『ポリグロシア』19、p.79-89
- 鎌田修（2004）「接触場面の教材化」『接触場面と日本語教育-ニューストブニーのインパクト』、p.353-370 明治書院
- ガンツェツェグ（2007）「モンゴルにおける日本語教育の改善ー自律学習能力を高めるためにー」『言語教育・コミュニケーション研究』2、p.15-23 昭和女子大学大学院
- 菊池富美子（2005）「学習リソースとは何かー日本語教育における学習リソース研究の概観」『言語文化と日本語教育』30、p.107-110
- 清水昭子（2012）「初級新入生の教室外での日本語コミュニケーション状況」『Polyglossia:the Asia-Pacific's voice in language and language teaching』22、p.149-155
- 徐孟鈴（2014）「実例に基づく会話教材の作成及び指導の実践ー日本人に街頭インタビューするプログラムを通して」『臺灣日本語教育学報』22、p.286-315
- 竹内明弘（2012）「初級者が遭遇した問題と言語管理過程を解明してコース改善に反映する試みーインタビューからの示唆を生かしてー」『Working Papers on Language Acquisition and Education』Vol.20、p.1-22 International University of Japan
- 田中望・斉藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際ー学習支援システムの開発ー』大修館書店
- 陳美玲（2013）「聴解におけるポートフォリオ評価の試みー自己評価を中心にー」『2013年台湾日本語教育学会 J-GAP TAIWAN

Can-do 教育実践発表会予稿集』、 p. 32-39

トムソン木下千尋 (1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』7、 p. 17-29 国際交流基金

浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子 (2006)「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性－』 p. 67-102 国立国語研究所

三宅若菜 (2007)「自律学習を基盤とした日本語学習において教師が注目する諸側面」『言語文化と日本語教育』33、 p. 124-128

林長河策劃、呂惠莉・康妙齡編著 (2006)『新実用日本語』会話Ⅱ

林長河策劃、李幸禧・川合理恵編著 (2006)『新実用日本語』会話Ⅲ

Little, D. (1991) . *Learner autonomy1: Definitions, issues, and problems*. Dublin: Authentik.

Little, D. (2007) . *Language learner autonomy: Some fundamental considerations revisited. Innovation in Language Learning and Teaching, 1(1)*, 14-29

Schwienhorst, K. (2007). *Learner autonomy and CALL environments*. New York: Routledge.

卷末參考資料 I：アンケート（第 1、6、10 週）

1. 你一週中除了上課時間以外，平均有幾天會自動說日語？
☐ 幾乎完全不會（跳到 3 題） ☐ 1～2 天 ☐ 3～5 天 ☐ 幾乎天天都會
2. 你平均一天用到日語的句數大約是？
☐ 1～4 句 ☐ 5～15 句 ☐ 16～30 句 ☐ 30 句以上
3. 你想增加課外說日語的機會。
☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意
4. 除了規定的課題，你課外主動說日文的機會變多了。
☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意
5. 承上題，對於這樣的結果你感覺如何？
☐ 非常開心 ☐ 開心 ☐ 無意見或沒有感覺 ☐ 不太開心 ☐ 非常不開心
6. 自由會話活動開始到現在，你比較習慣和同學說日語了。
☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意
7. 透過此項課題和錄音同學交流的機會增加了。
☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意
8. 和同學練習日語比較沒有壓力（跟不認識的人，老師或日本人比較起來）。
☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意

9. 和同學練習日語可以從中得到樂趣。

☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意

10. 透過自由會話的課題，你建立了自我安排課外時間的習慣。

☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意

11. 紀錄單的持續記錄讓我可以清楚地知道自己會與不會的地方進而促進我的日語學習)

☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意

12. 老師的回饋對此課題有幫助。(若沒有老師的回饋我無法獨力持續進行本項課題)

☐ 非常同意 ☐ 同意 ☐ 無意見或不知道 ☐ 不太同意 ☐ 非常不同意

13. 此項活動對我而言感到最困擾的是 (自由書寫)

14. 對本項課外活動的任何感想或建議 (自由書寫)

卷末參考資料Ⅱ：ログシートの記入例

第 3 週 名前: _____

第一次錄音

① 日付: 3/1 ② 錄音時間: 06:12 ✓ ③ テーマ: 日曜日 ④ 主要談話流程:

天気 ⑤ うちへ帰って ⑥ ペット ⑦ 何をして ⑧ いますか ⑨ しましたか

⑩ 表現不錯的地方 ⑪ 有較多新的單字 ⑫ 互動中交際語 ⑬ 和たい音聲 ⑭ 很好。

⑮ 不會或失敗的地方 ⑯ 練習ペット時用的句型 ⑰ 音量後 ⑱ 沒有變化性 ⑲ 趁這個機會學一些表現句型

第二次錄音

① 日付: 3/10 ② 錄音時間: 07:56 ✓ ③ テーマ: 需 ④ 主要談話流程:

何をして ⑤ いますか ⑥ 子供のころ ⑦ 今の夢 ⑧ の夢

⑨ 比第一次進步的地方 ⑩ 看到對方有不合語的: 合聲+結構 ⑪ good ⑫ 結果比上次自然 good ⑬

⑭ 不會或失敗的地方 ⑮ 思考時間多 → 慢的想無妨, 是時可用家上 ⑯ 話題不閉 → 練習相關句型問答 ⑰ 考慮せよ ⑱ 回應不多句型切 ⑲ 下次熱情一點 ⑳ 幫忙對方很棒!

⑳ 其他 ㉑ 幫忙對方很棒!

教師回饋 ㉒ 同樣的事用不同句型表現 → 下個學習目標. ㉓ 彼此默契愛好可互相配合幫忙對方很棒

卷末參考資料Ⅲ 氣付き報告書

気付きレポート

1. 不會的地方:
想講的單字不會說
文法、時態用錯
回應的句子重複性高或很少
話題延展不開，無法深入聊天
結尾不自然
對方的說明聽不懂
2. 為什麼不會:
單字忘記了或沒背過
沒有想清楚就講出來或不知道怎麼用就亂講
不知道如何回應，回應的方式記得少
相關話題聯想力差
不知如何結尾
說明的詞彙沒聽過沒學過
3. 如何進步:
事先查要講的單字
複習讀本
看綜藝節目學主持人的對話方式
事先想好話題的重點
多看日本的節目
用自己的話說明

4 我會 ~

我會用自己的話說明
我會協助對方
我會讓話題變有趣
我會自然地回應
我會話題連想
我會提供新情報
我會事先查資料
我會跟話題相關的單字
我會將中文資料翻成日文
我會介紹行走在山所
我會讓話題貼近生活
我會用日文聊天

- 我們會是文字化邊反省是否有錯誤。
- 我們可以開日文來介紹、討論節目。
- 我們可以開日文來分享喜歡的歌曲。
- 我們可以開日文來批評學校的伙食。
- 我們可以用日文來討論時事。
- 我們的日文對話愈來愈自然了。
- 我們從日文對話互相瞭解對方的興趣和大小事。
- 我們從對話裡學會了很多單字。
- 我們會試著反問對方不懂的字。
- 我們會從以前上課的講義找和主題相關的資料。
- 我們有試著先擬稿，以讓話題變得更自然。
12. 內容比以前豐富了。
13. 話題變多了。
14. 聊得較深入了。
15. 會先查與主題相關的單字